

「10年のあゆみ」

下部消化管グループ

片倉 響子

大平弘正先生が福島県立医科大学消化器内科学講座教授に就任されてから10年が経過しました。この10年間、教室の中で下部消化管グループが行ってきたことを振り返りたいと思います。臨床においては、炎症性腸疾患患者の増加とともに、生物学的製剤の導入により治療が大きく進化し、一方でその問題点も徐々に明らかとなってきました。栄養療法と手術しかなかった時代と比較し、積極的な生物学的製剤治療により寛解導入も望めるようになり、外来通院での治療管理が主となってきました。二次無効などの問題に対し、今後は新たな生物学的製剤の使用やそれらの使い分けなど検討が必要となり、引き続き県内の炎症性腸疾患診療の中心となり取り組んで参りたいと思います。内視鏡検査については、カプセル内視鏡の導入やシングルバルーン小腸内視鏡の導入により、これまで内科的診療が困難であった小腸の疾患に対して、診断と治療が飛躍的に進みました。消化器官であるとともに大きな免疫器官でもある小腸においては未解明の部分も多く、小腸の炎症所見の鑑別などこれから取り組まなくてはならない課題も残されていると思います。また、内視鏡診療部の引地先生のご協力により、大腸癌に対するESDが施行されるようになったことも、この10年の中ではたいへん大きな変化であったと思います。

研究に関しては、腸内細菌叢および細菌やウイルスの持つ自然免疫機構のToll-like receptor (TLR)と炎症性腸疾患の発症機構の解明と治療法開発に取り組んで参りました。塩谷康夫先生は、好中球エラスターゼ阻害剤によるマウス実験腸炎の改善効果を示し、炎症性腸疾患の今後の治療薬への応用が期待できる結果を報告しました。菅野香先生は日本人の潰瘍性大腸炎におけるTLR9遺伝子変異・多型と臨床的特徴について検討しました。斎藤桂悦先生は腸内細菌の持つLPSトレランスによりマウス実験腸炎が抑制され、TLR4シグナル伝達の抑制因子であるIRAK-Mの関与について報告しました。鈴木良磨先生はTLR7リガンド投与により誘導された制御性T細胞によりマウス実験腸炎が抑制されることを報告しました。TLRに関しては2011年に「自然免疫の活性化に関する発見」においてブルース・ボイトラー博士（その他）がノーベル賞を受賞し、この10年で最も研究の進んだ分野のひとつでありました。その後、GWASにより炎症性腸疾患の疾患感受性遺伝子も明らかになりましたが、TLR遺伝子は直接関連するものではありませんでした。これはTLRの炎症性腸疾患への関与を否定するものではなく、引き続き腸内細菌叢の炎症性腸疾患発症への関与は興味深い研究対象であると考えています。

臨床も研究も日々進化し、常に知識をupdateさせていく必要があります。今後はひとつのテーマに縛られず、幅広い分野から情報を得て実臨床に貢献できる研究を行い、またできれば「屋根瓦方式」を取り入れた人材育成をしていきたいと思っています。